

2024年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
人間健康学部 人間健康学科	講師	萩原麻耶
最終学歴	学位	専門分野
筑波大学大学院人間総合科学研究科スポーツ医学専攻 攻修了	博士（スポーツ医学）	スポーツ医科学、アスレティックトレーニング

I 教育活動

○理念・目標・方針・計画（方法）

【理念】

大学での学びと経験を通し、自分自身への自信を持ち活躍できる人材の育成

【目標】

本学における「三つの言葉」を念頭に置き、教育を行なっていく。大学での講義や活動を通じた学びや活動を通して、失敗を恐れずにチャレンジする事の大切さを伝え、様々な経験する場を提供する。

【方針】

自ら考えを持ち、発言することが社会に出た時に大切になるので、その土台となるような学び場を提供する。

【計画（方法）】

講義では、解剖生理学などの専門用語を使い講義を進めていくので、できるだけわかりやすく説明し、記憶の定着が図れるように身近な事例を用いた説明を行い、授業内でアウトプットする機会を設け授業を進めていく。演習や実習の授業では、学生自身が考えアイデアを出し、一人で考える時間やグループで考えをまとめる時間を作り、インプットだけでなく、アウトプットできる時間を儲ける。

○担当科目（前期・後期）

（前期）

ストレングス&コンディショニング実習、プログラムデザイン、基礎演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

（後期）

フィットネステスト・評価Ⅱ、スポーツ医学、解剖生理学Ⅱ、基礎アスレティックトレーニング、アスレティックトレーニング実習、基礎演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

○教育方法の実践

講義系の授業では毎回穴抜き資料を配布し、受講生が主体的に講義へ参加する仕組みを取り入れた。毎回の授業の最後に課題を出しアウトプットする時間を作り、授業内容を復習できるようにした。実技系の講義では、トレーニング実施時に注意する点を学生自身でも分かるようにするため、授業の最後に実技で行ったことを学生が言語化し講義内容をより深く学べるように課題を出した。

○作成した教科書・教材

全ての講義で扱う内容の資料を作成し、必要な部分があれば動画などを用いて理解が深まるように授業を運営した。

○自己評価

2年目になり昨年度の反省を生かし、授業の資料や時間配分などを工夫することができ、昨年度よりもスムーズに授業を行うことができた。良くなった部分も多いが、次年度もさらに良い授業を展開するために資料を整理し、内容を見直していくことを継続したい。

II 研究活動

○研究課題

サッカー選手における股関節の傷害・疼痛調査と予防方法の検討

○目標・計画

【目標】

サッカー選手の股関節の傷害・疼痛調査を実施し、発生実態の詳細を検討する

【計画】

現在収集しているデータ分析を行い発表し、追加調査を実施し検討していく

○2017年4月から2025年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）（国内）

● 博士論文

Hagiwara M. Investigation of groin pain incidence among male soccer players. 筑波大学大学院人間総合科学研究科スポーツ医学専攻. 2022.11.

● Hagiwara M, Mashimo S, Yoshii D, Homma T, Shiraki H. Investigation of groin pain in amateur soccer players in a 37-week period. 日本アスレティックトレーニング学会誌, 7巻2号; 235-242, 2022.

● Hagiwara M, Mashimo S, Shiraki S. Epidemiological study of amateur soccer players: a 17-month study to determine injury and pain. Journal of Physical Fitness and Sports Medicine. 2022;11(2):79-86.

● Hagiwara M, Usami T, Mashimo S. Epidemiology of injuries in amateur soccer players. 新潟経営大学紀要, 27号, 17-23.

● 萩原麻耶, 吉井大樹. 筋に特異的に反応する経穴への刺激が及ぼす握力への影響について. 新潟経営大学紀要, 27号, 25-30, 2021.

● 宇佐美知代, 後藤康則, 萩原麻耶. 貧血状態にある男子大学サッカー選手の栄養摂取状況. 新潟経営大学紀要, 27号, 9-16, 2021.

● 眞下苑子, 萩原麻耶. 大学生における中学生時および高校生時のスポーツ傷害の実態 第2報-傷害発生状況と原因に着目して-. 大阪電気通信大学人間科学研究, 第22号, 37-43, 2021.

（学術論文）（海外）

● Mashimo S, Yoshida N, Takegami A, Hirono J, Matsui Y, Hagiwara M, Nagano Y. Japanese transition of web-based questionnaires on overuse injuries and health problems. PLoS ONE, 2020;15(12):e0242993.

（学会発表）

シンポジウム（招待発表）

● 萩原麻耶. 若者のカラダに生じる諸問題の現状と課題:多くのサッカー選手が抱える股関節の傷害と痛み. 第25回日本健康支援学会年次学術集会, 愛知, 2024年3月2日.

（学会発表）（国外）

- Mashimo S, Ogaki R, Ogura A, Nishida S, Ito A, Waki H, Hirono J, Hiramatsu Y, Hagiwara M, Hara K, Oda K, Yoshida N. The usefulness of the Japanese injury surveillance systems for sports injury prevention. 28th Annual Congress of the European College of Sport Science, France, July 4-7, 2023.
- Nakajima S, Owasa M, Nagaoka T, Mutsuyama A, Cho C, Hagiwara M, Koizumi K. The relationship between lifestyle and residence style in Japan female university martial arts players. 13th Asian pacific Conference on Clinical Nutrition, Indonesia, August 4-7,2019.

(学会発表) (国内)

- 眞下苑子, 吉田成仁, 宝官孝明, 竹上綾香, 廣野準一, 松本優也, 萩原麻耶, 永野泰治. Oslo Sports Trauma Research Center 質問紙の日本語訳および妥当性・信頼性の検討. 第9回日本アスレティックトレーニング学会学術大会. 茨城 (Web 開催), 2020.12.5-31.

(その他)

特になし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況 (学内外)

次年度の科学研究補助金へ研究分担者として申請したが、不採択であった。

○所属学会

National Athletic Trainers' Association、ジャパン・アスレティックトレーナーズ機構、日本体力医学会、日本アスレティックトレーニング学会、日本運動疫学会、日本臨床スポーツ医学会、日本健康支援学会、NSCA ジャパン

○自己評価

今年度も自分の研究を予定通りに進めることができなかったが、共同研究者として4つの研究に参加させてもらい、それぞれの研究を進めることができた。自身の論文は投稿しているが採択には至っていないので、次年度中に採択されるように執筆を進める。次年度は計画通りに研究を進められるように努力をしていく。

III 大学運営

○目標・計画

【目標】

国際交流センター運営委員会、学生委員会、強化指定部クラブ支援WGに所属

【計画】

今年度は学生委員会に所属することになり学生会との活動も始まるので、学生が大学生活でたくさんを経験をする場となるようサポートをしていきたいと思う。国際交流センター運営委員会では本学学生が期間を問わず留学できるような環境づくりのサポートをしていきたい。また、強化指定部クラブ支援WGにも所属させていただいているので、強化指定部がより良い活動ができるよう尽力していきたい。

○学内委員等

国際交流センター運営委員会、学生委員会、女子サッカー部副部長 (兼トレーナー)

○自己評価

国際交流センター運営委員会の活動としては主としての活動はなかったが、学内で開催されているイベントに協力し参加した。学生委員会では大学祭の実行委員会の会議に参加したり、学生主催のイベントの補助をしたり、どのように大学祭が運営されているのかを知ることができた。女子サ

サッカー部では日々の練習から公式戦に帯同し、皇后杯の本戦へ出場するサポートができた。まだまだやれる事はあると思うので、さらに良いサポートができるよう活動していく。

IV 社会貢献

○目標・計画

【目標】

研究面では、現在の研究課題としているサッカー選手の股関節の傷害・疼痛調査の結果を現場へと還元できるようにしていきたい。また、アスレティックトレーナーとしてできることを本学のみならず地域の方々へと還元できるよう土台作りをしていく。

【計画】

論文発表と学会発表できるように準備して、投稿していく。トレーナー業の面では、女子サッカー部のサポートがよりよくできるような環境を作ることと、学生トレーナーの指導にも力を入れ、学生が目指すトレーナーになれるよう知識と技術を教えていきたい。

○学会活動等

○地域連携・社会貢献等

高大連携授業では怪我をしない身体づくりをテーマとし、身体のアライメントがどうなっているのかチェックしたり、テーピングの実技を行った。

○自己評価

女子サッカー部のトレーナーとしての活動がメインとなった一年になった。地域や社会貢献は女子サッカー部の活動を通して関わる場面があったが、主としての貢献はできなかったので次年度の課題としていきたい。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

自分の専門分野だけでなく、別分野の新たな学びも得られるよう視野を広げていき、自身の学びを学生へと還元できるよう努力していく。

VI 総括

今年度は大学にもだいぶ慣れ、継続して担当している科目については昨年度よりスムーズに授業運営ができたと思う。新規科目についてはまだまだ改善することができるので、良い授業ができるように準備をしていきたい。研究面では自身の論文は採択には至っていないので、採択されるように執筆をしていきたい。共同研究者としては4つの研究に携わることができたので、次年度もすでに決まっている研究にも力を入れていきたい。1番メインに活動したのが女子サッカー部のトレーナーとしてのサポートだった。初年度だったので大変な面はあったが、着任前よりもケガを減らすことができたのが良かったと思う。まだまだ改善するところがあるので、継続して頑張っていきたいと思う。

以上